

第 11 回 学習院女子大学畠山ゼミナール主催 講演会

取り戻せ日本力

～希望の次代を切り拓くために～



演題：学生時代に何を学ぶか

—日本の将来を担う者として—

講師：金 美齡氏(評論家)

10月17日(日)13:30～開会(13:00 開場)

講演会企画主旨

「だけれども僕はやる。この世の中に誰かがやらなければならないことがある時、僕は、その誰かになりたい」—この言葉は、日本の役割を自らの役割と考え、国際社会に貢献しようとした日本人青年の言葉である。17年前の平成5年、それまで20年もの内戦が続いていたカンボジアでようやく停戦合意が成立し総選挙が実施されることになった時、彼は自ら国連ボランティアの一員として参加し、支援活動の途中で凶弾に倒れ、25歳の生涯を閉じた。

次代を切り拓く主体として活躍することを志し、日々、国際社会と日本の将来を真剣に学んでいる私たち畠山ゼミ生にとって、この言葉は、一人ひとりの姿勢を正し、主体者として生きることの意味を問い合わせるものであった。また、青年の高貴な生涯は、誇りある日本人として生きようとして私たちに、大いなる自信を与えてくれた。

省みれば、国内政治の混迷、アジアの政情不安、世界規模の経済金融危機、テロや大量破壊兵器拡散の脅威など、日本を取り巻く情勢は内外ともに緊迫の度を高めている。さらに国家間や民族間の衝突・摩擦が複雑化する中で、日本も国際的役割が強く求められるようになっている。今こそ日本は国際社会の中で責任ある役割を主体的に構想しなければならないのではないだろうか。

しかし、そのためには、日本が国家として自立的地位を確立するとともに、日本国民一人ひとりが国際社会の将来を見据え、国民としての役割をどう果たしていくかを自らに問わなくてはならないであろう。

私たちは国際社会と日本の将来を真剣に学び、自らが国際社会においていかなる役割を担うべきかを日々探究している。日本の実力を冷静に判断し、それを活かす道を探り、日本人として与えられた役割を果たそうと志している。そのためには、長い歴史の中で先人達が築き上げてきた精神と知恵を受け継ぎ、時代を動かした先人達の行動力に学び、課せられた責務を誠実に果たしていきたいと思う。

私たちは、先人達が築き上げた伝統を基盤に現代日本の潜在力を発揮することを「日本力」と定義するとともに、常に回帰すべき原点として、この「日本力」を確固たるものにしたい。

今年度の学園祭企画を構想するにあたって、私たちは『取り戻せ「日本力」～希望の次代を切り拓くために～』をテーマに掲げた。これから世界を希望に満ちたものにすべく、日本国と日本人としての自らの役割を確立したいと考えたのである。

人間はひとりで生きているわけではない。人ととのつながりのうえに人は生かされている。一人ひとりが自己を確立し、それぞれ国を想い、世界を想い、主体的に行動していくこそが、希望の次代を切り拓く道である。日本として世界のために何ができるのか、国民として日本のために何ができるのか、ということを考え、自己の生き方を問い合わせなくてはならない。

本講演会をもって、自らが日本人であることの意識を自覚する場とし、参加者と共にこれから日本の姿を探求していきたいと考えるものである。

講師紹介

金美齡（きんびれい）氏

1934年台湾に生まれる。日本統治下の台湾で日本精神を学びながら育つ。1945年、日本敗戦。その後、国民党による台湾人弾圧時代を経験し、1959年、日本の早稲田大学第一文学部英文科に留学してから台湾民主化運動に尽力する。1971年、早稲田大学大学院文学研究科博士課程単位修了。1975～76年まで英国ケンブリッジ大学客員研究員を務め、1988年にJET日本語学校を設立。2000～2006年、台湾総統府国策顧問。2009年、日本国籍を取得。現在、テレビ、書籍、講演会を通じてさまざまな提言を行っている。その凛とした生き方は、国を背負う覚悟や前向きな人生を送る勇気を多くの日本国民に与えている。



国というのは自分であり、自分は国なのです。国が発展したり尊敬を集めるのも、抽象的な国がするのではなく、その国民の努力と行いによるのです。

「自然の恵みに感謝する」「ものを大切にする」「嘘を吐かない」「まじめに働く」「規則を守る」——このような日本人の美德は、いつの時代であっても人としてとても大切なことであり、素晴らしい財産なのです。

これらが、なんの努力もせずに過去から受け継がれてきたと思ったら、それは間違いです。日々の生活や仕事のなかで、あるいはさまざまな行事を通して、能動的に伝えられてきたものです。つまり、伝えたいこと、伝えるべきことは、教育によって伝える努力をする必要があるということです。

（『凛とした母親が日本を救う』より）

畠山ゼミナールについて

畠山ゼミナールは、国際社会と日本の将来を真剣に学ぶ場です。

今日の国際問題を分析し、今後の世界で巻き起こるであろう事態を予測し、さらに、国際問題に携わった古今の指導者の決断・行動についても検討を加え、それら指導者の立場を自らに置き換ながらどう判断・行動するかを自問したりしています。こうした、一步踏み込んだ議論を重ねることで、一つの事象に対するさまざまな視点を獲得し、本質を見極める思考能力を深めていきます。

授業に臨むゼミ生の姿勢は真剣そのもので、国際政治の真の姿を捉えるべく、熱のこもった議論が展開され、毎回、新たな発見があり、授業の回を重ねるごとに着実に成長している自分を実感できるゼミです。

本年度の春の授業では、山本七平著『日本人とは何か。』をテキストに、日本の本質について国際比較を通じて把握するとともに、古代から今日に至るまでの日本の国際社会における位置づけの変遷を検討しました。

また、毎年夏には合宿を行います。例年、模擬サミット、又は、外交・安全保障に関するシミュレーション・ゲームを丸一日かけて行います。模擬サミットでは学生それぞれが主要国に分かれ、その国の立場から議論に臨みます。諸外国の情勢・各國間関係・テーマに関する今後の課題等を見据えながら、最終的には主要国の共同宣言の採択を目指します。一方、シミュレーション・ゲームでは事前に設定された問題について、刻々と変化する情勢にあわせながら、各国それが置かれた条件の制約の下に対応策を講じて、局面の打開を図っていきます。本年度は、外交・安全保障に関するシミュレーション・ゲームを丸一日かけて行いました。テーマは、パキスタンを取り巻く各国の対応と中央アジア・南西アジアの情勢についてでした。

さらに、畠山ゼミでは、年間テーマを掲げ、4班に分かれて、年間テーマに関連した共同研究を行い、1月に研究の成果を発表します。なお、今年度の年間テーマは、「変革の時代に生きて—国際的日本の探求—」です。班毎にテーマに関連した研究課題を設定し、研究に取り組んでいます。

このような様々な活動に取り組むことを通して、ゼミ生は自らが意欲的に考え主体的に物事に取り組むおもしろさ、また、自分独りでは成し遂げられない大きな成果をあげができるチームワークの大切さを実感していきます。

畠山ゼミナール学園祭企画のこれまでの実績

畠山ゼミは平成12年のゼミ発足以来、毎年講演会などを主催してまいりました。

第一回『二十一世紀の日本女性の使命—地球村の一員として—』

木村恵子氏(エッセイスト・NHK ラジオ深夜便ワールドネットワークリポーター)

講師は、国際的に有名な生命倫理学者、法医学者の夫君とともに約30年間を海外で過ごされました。ハノイ、ジュネーブ、ワシントンDCなどでの生活を通じて得た体験を下に異文化交流の課題について語っていただきました。

第二回『あなたはこのテロをどう見ますか—時代は変わった。これは「文明の衝突」の始まりか?』

橋本光平氏(PHP研究所国際部長)、川上高司氏(防衛庁防衛研究所研究室長)

当初は、学生時代に何を学ぶべきかを考える講演会の予定でしたが、直前に起こった9・11米中枢同時多発テロをきっかけに劇変した国際社会の課題を考えるフォーラムに切り替え、参加者と徹底討論しました。当日の様子は、朝日新聞や雑誌「サピオ」(小学館)でも取り上げられました。

第三回『かわかない心—人生探究の旅—』

松原哲明氏(臨済宗龍源寺住職・港区教育委員長職務代理・青年海外協力隊派遣前講師)

国際協力に必要な精神とは何かを考えるために開催しました。NHK人間講座でも有名で、青年海外協力隊派遣前講師として海外で活躍する多くの青年を指導しておられる講師に、人として生まれた意義を語っていただき、自らの生き方、人のために生きるという使命の尊さを学びました。

第四回『日本は国家なのか—拉致問題が問いかけたものと蘇る国民の絆—』

蓮池透氏(拉致被害者家族会事務局長)、石高健次氏(朝日放送プロデューサー)

国家とは何かを考えるために拉致問題を取り上げてシンポジウムを開催しました。国民の生活も財産を守れず、国民の命を守ることも出来ない国は果たして本当の国なのかを問いかけました。拉致問題は単なる政治問題・主義主張の問題以上の問い合わせを含むと実感したシンポジウムでした。

第五回『地上の星—さまよえる日本の心 立ち向かう挑戦者たち—』

今井彰氏(NHK「プロジェクトX」プロデューサー)

この年、オリンピックでの日本選手の活躍やイラクにおける奥大使の殉死などの出来事があり、緒方貞子氏をはじめ国際社会で活躍する日本人や、日本人としての自らの原点について考えたく企画しました。「プロジェクトX」で紹介された人々の日本人としての生き方についてお聞きし、私どもの人生に大きな指針を与えていただきました。

第六回 『激動する国際社会 公務に生きる日本人たち』

田浦正人氏(一等陸佐・第三次イラク復興業務支援隊長)、

天内真裕美氏(二等陸尉・第三次イラク復興支援群衛生隊)

「国際社会の一線で公務に生きる日本人は何を思い、何を感じ、何を考えているのか」をテーマに、イラク復興支援の任務を遂行した陸上自衛隊幹部をお迎えし、日本の国際的使命を果たすために任務に挺身している人々の覚悟や使命感について考えました。

第七回 『日本の心を生きる私—真の異文化理解のために—』

藤ジニー氏(山形県銀山温泉「旅館藤屋」女将)

調和した国際社会を築くには「異文化理解」だけでは不十分で、各国が相互に相手の文化や価値観を受容し、更に、かけがえのない大切なものを実感することが必要ではないかと考え、老舗旅館のアメリカ人女将の具体的な生き方・姿勢から、異文化交流の真のあり方について学びました。

第八回 『Rethink 自然を生きる日本人～国際社会へのメッセージ～』

富山和子氏(大正大学教授)

地球環境問題を巡って激しい論争が世界のいたるところで展開され、相変わらず各国の利害が錯綜する状態が続いていることに疑問を感じ、改めて日本人の自然観を見つめ直しました。古来、日本人が培ってきた精神、人生観こそが地球環境問題を考えるにあたり重要と考え、国際社会における日本人だからこそ出来る、自らの使命を果たしていく道筋を見出しました。

第九回 『明治・日本外交の真髄—先人に学ぶリーダーの使命—』

岡田幹彦氏(日本政策研究センター主任研究員)

今の日本外交には日本らしさが足りないと感じ、かつての日本外交の輝きを取り戻したいとの思いで、日本外交を真の在り方を探究しました。偉大な先人の生き方を学び、その精神を自らの生き方に反映させることで、ゼミ生はじめ来場者のひとりひとりがリーダーの資質を身につけることを目標としました。

第十回 『転換する国際社会—日本の未来戦略』

谷内正太郎氏(前外務次官)、宝珠山昇氏(元防衛施設庁長官)

池田清彦氏(早稲田大学教授)、土田哲氏(航空宇宙エンジニア)

グローバル時代の日本の役割を考えるため、「転換する国際社会—日本の未来戦略—」をテーマに、初めて二日連続のシンポジウムを開催し、併せて、展示発表も行いました。今日の時代を「競争・成長・繁栄・進歩」から「多様なるものの調和・内面的成熟」という価値観の転換の過渡期ととらえ、外交・安全保障・エネルギー・宇宙開発について提言を試みました。

調査分析と提言

- 1. 学習院女子大学・学生意識調査—結果と考察**
- 2. 提言：次代を担う主体性を獲得するために**

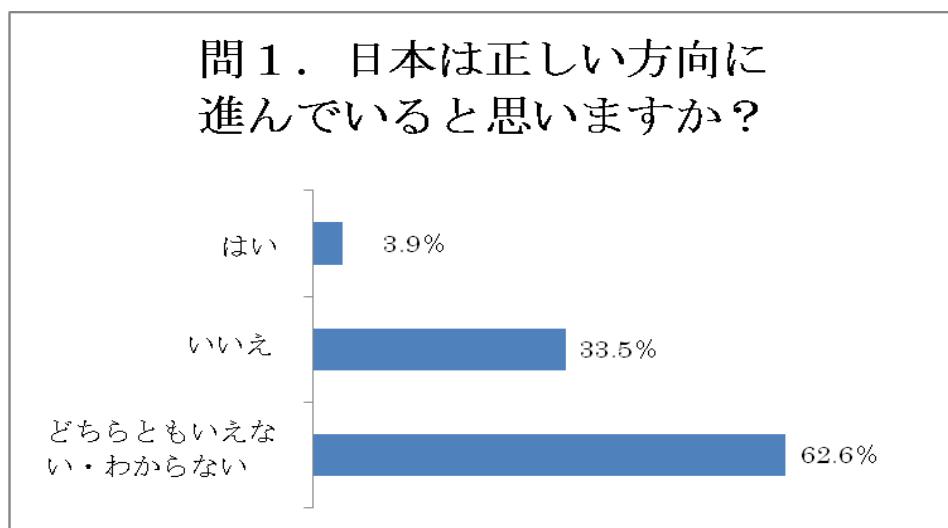
1. 学習院女子大学・学生意識調査—結果と考察

アンケート目的～学女生が描く日本の未来像を探る～

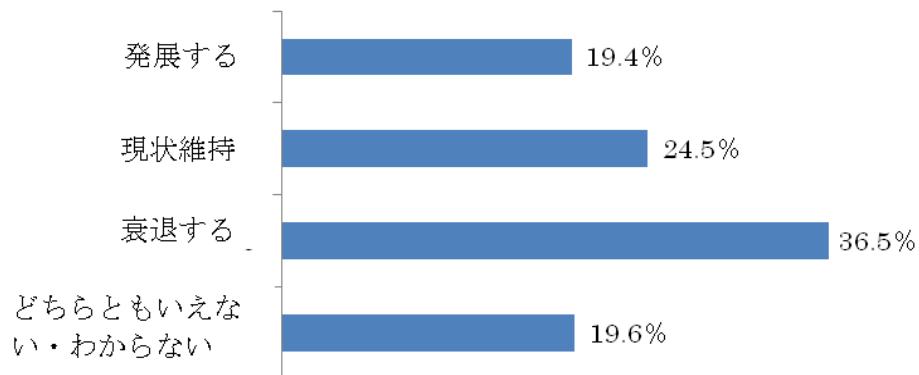
今日、日本は国際社会での重要な役割が内外から強く求められています。その次代を担う主体者たる若者に、当事者という意識はあるのでしょうか。私たちは、自分たちと同じ当事者である日本の大学生が、「自国に対する想いや日本人としてどのような態度で国際社会へ臨もうとしているのか。」に焦点を当てて、現状を把握するためにアンケートを実施するに至りました。

2010年7月の1カ月間に、学習院女子大学の学生に対してアンケートを行い、全学生の約6割にあたる1003人からの回答を得ることができました。このアンケート調査結果から更に考察することで、次代を切り拓く私たち学生に必要な資質を自覚していきたいと考えています。

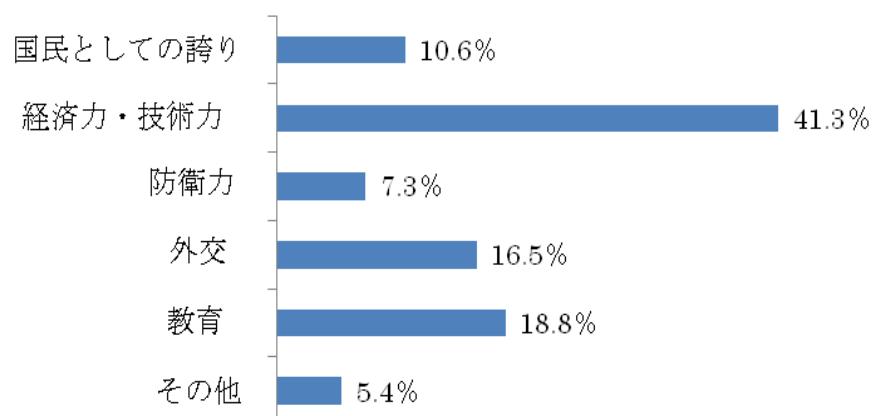
アンケート結果



問2. 20年後の日本は 今よりも・・・？



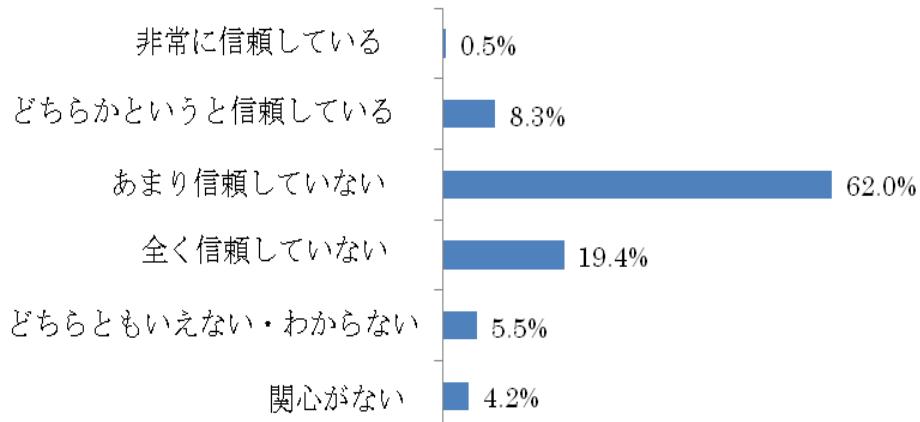
問3. これから日本にとって 最も大切なものは？



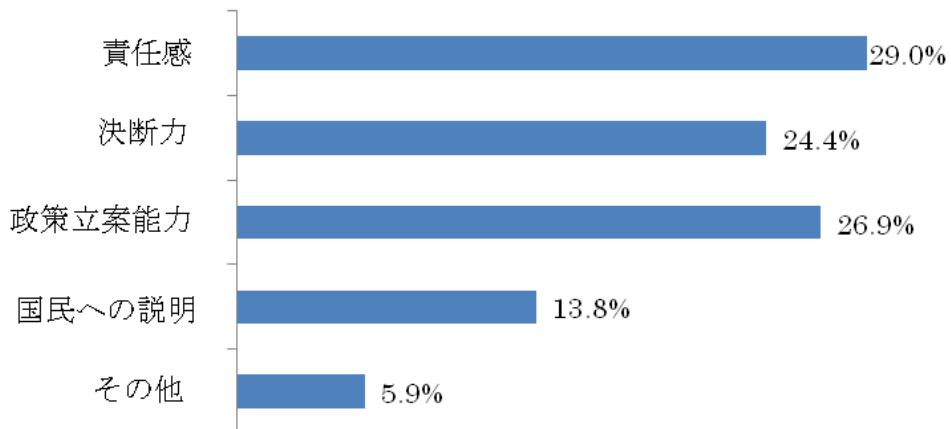
<その他の意見>

国民としての自覚、自国愛、危機感、1人ひとりの問題意識、結束力・組織力、政治・政治家たちの意識変化、政府の安定、内政力、政治的センス、政界の乱れを直す、首相のリーダーシップ、福祉、お金の使い方

問4. 日本の今の政治を信頼していますか？



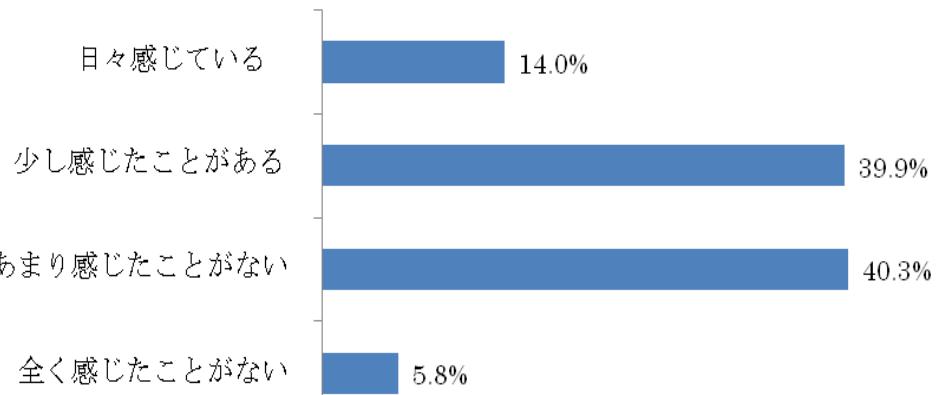
問5. これから日本の政治に最も必要なものは？



<その他の意見>

外交力、有言実行、国民の政治への信頼、政治意識、誠実さ・正しさ・正直さ、リーダー力、世論に流されない意思、政治の実行能力、弱者への対応政策、国会議員の数、統率力、お金の使い方を考えること、カリスマ性、世論に流されない意思、政治家の一掃、国民の声を聞き公平な立場で議論をすること、若者のパワー、実行力・行動力、など

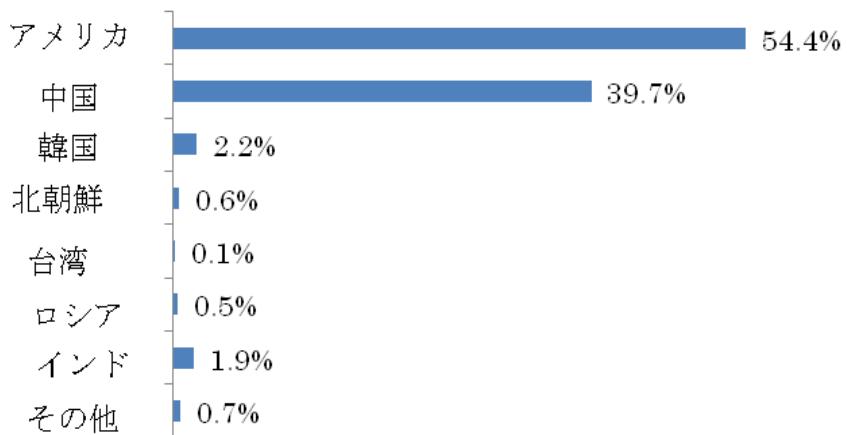
問6. 日本の安全保障に不安を感じたことはありますか？



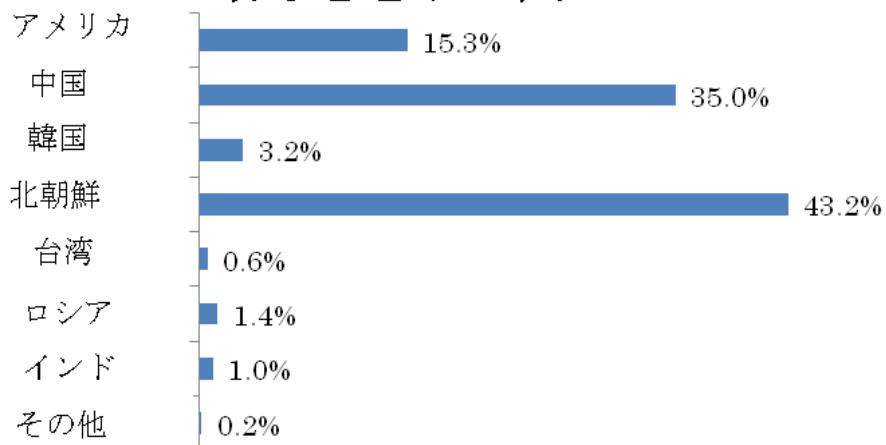
＜はいと答えた人に、それはどんなときか＞

テレビニュースで扱っているとき、アメリカとの基地問題の時、北朝鮮との問題（ミサイル、拉致問題、核問題）、核問題など

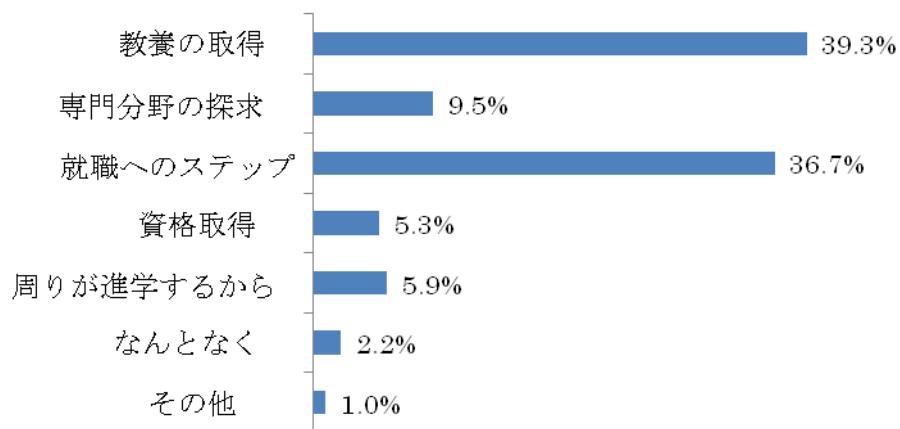
問7. 将来の日本にとって最も大切な国は？



問8. 将来の日本にとって 最も懸念する国は？



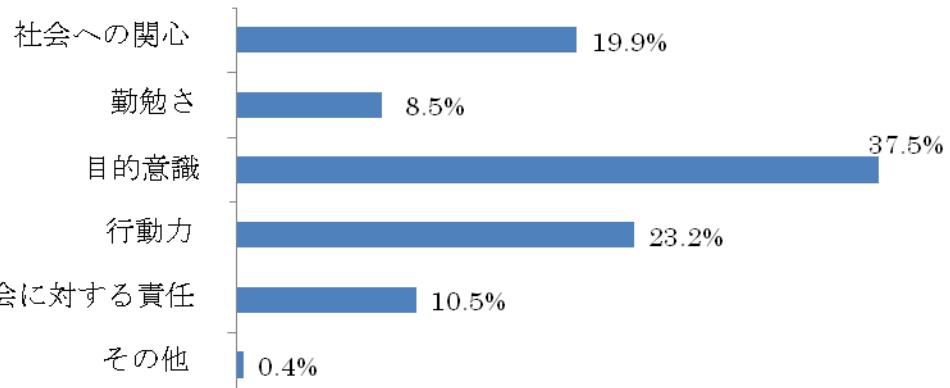
問9. あなたの大学進学の 理由は？（複数回答可）



＜その他の意見＞

自由な時間、海外研修、親のすすめ、自分がなりたい自分になるため、保険、将来のため、「大学」に行きたかった、遊べるから

問10. 大学生として 最も必要なことは？



<その他の意見>

マナー、経験、遊び、考えること

問11. あなたにとって日本とは？（記述解答）

母国・故郷・祖国、など 147人

誇りに感じる（その他、同趣旨の意見） 95人

文化的に優れた国 34人

（文化、伝統、技術をもつ国、アイデンティティーの一部、和を大切にする国、などを含む）

政治経済的に恵まれた国 33人

（豊かな国、安心・安全に暮らせる国、などを含む）

あまり誇れない国、いくつもの問題を抱えた国、など 65人

政府が信頼できない国 29人

（優柔不断、頼りない、有言実行できていない、などを含む）

アンケート考察～社会に対する高い関心と将来への希望～

アンケート結果から、日本が正しい方向に進んでいると確信している学生がほとんどいない（3.9%）という事実が明らかになりました。他方、63%が「どちらともいえない・わからない」と答えています【問1】。また、別の質問では、日本の将来は衰退していくだろう、と考えている学生の割合も全体の3分の1以上に及んでいます【問2】。

しかし、この結果をもって、今の学生が将来の日本に対して絶望・あきらめを感じ、無気力に陥っていると取るのは早計でしょう。今の学生が少なからず日本の将来に対して関心を抱いていることは、例えば、日本の今の政治に関心がないという学生が4.2%と極めて僅少なことからもうかがえます【問4】。

また、これから日本の日本にもっとも大切なものとして、「経済力・技術力」（41.3%）に次いで、「教育」や「外交」を挙げた学生がそれぞれ2割近くおり、1割前後の学生が「国民の誇り」や「防衛力」を挙げるなど、単なる絶望やあきらめからは出てこない数が読み取れます【問3】。

このように考えると、6割以上の学生が「どちらともいえない・わからない」と答えている【問1】意味は、決して、絶望・あきらめ・無気力の現れではありません。むしろ、少なからぬ学生が日本の政治に関心を寄せているものの、よくよく考えた上でどちらとも判断しかねるという一種の不透明感や不確実性を感じていると解することができます。

当然ながら、こうした不透明、不確実な日本の将来を切り拓くべき今日の日本政治に対する学生の目は厳しいものにならざるを得ないでしょう。事実、日本の今の政治に信頼を寄せている学生は皆無に等しく（0.5%）、「あまり信頼していない」（62%）、「全く信頼していない」（19.4%）が合わせて8割に達しています【問4】。また、それとは逆に、これから日本の日本政治に最も必要なものとして、責任感・政策立案能力・決断力を挙げている学生の割合が合計で8割に及んでおり【問5】、逆にいえば、今の政治に責任感・政策立案能力・決断力が不足していると感じている学生が少なくないことを物語っています。ちなみに、これから日本の日本政治に最も必要なものとして、「国民への説明」を挙げた学生は13.8%で、学生の多くは、国民への説明以前に、政府として、政治家として、一国のリーダーとしての責任を果たす実行力・行動力こそが問題だと感じているようです。

日本の安全保障観についての質問【問6】では、日本の安全保障に不安を「少し感じたことがある」と答えた学生と、「あまり不安を感じたことがない」と答えた学生が、それぞれ4割となっているが、「日々感じている」と答えている学生が14%となっています。この背景には、最近の普天間基地問題や、北朝鮮の核開発やミサイル問題などに関する報道が影響しているものと考えられます。

将来の日本にとって最も大切な国として過半数がアメリカを挙げている【問7】のに対して、将来の日本にとって最も懸念する国として43%以上が北朝鮮を挙げている【問8】が、中国がどちらの項目でも第二位（最も大切39.7%、最も懸念35%）になっており、存在感と脅威感の双方が高まっていることを示しています。

大学進学の理由についての質問【問9】で明らかとなったのは、「就職へのステップ」として大学進学を捉えている学生の割合が高かったことです。この点のみに注目すれば、今の学生は、より良い就職のために大学へ来ており、就職が目的で、大学は手段にすぎなくなっているともとれます。この背景には、昨今の不況が反映している面もあると思われるが、大学自身が就職率を競っていることで拍車をかけている面も否定できないでしょう。しかし、その一方で、大学進学の理由を「教養の修得」39.3%、「専門分野の探求」9.5%と5割近くの学生が、大学=学ぶ場としての本来の役割を自覚している点は見逃してはなりません。

「大学生として最も必要なことは?」【問10】という質問に対しては、「目的意識」「行動力」「社会への関心」を挙げた割合が高く、合計すると8割にも上ります。社会への関心を抱きながら、自己の行動にきちんと目的を見出そうとする姿勢は、学生自らが社会人の予備軍であることの自覚の現れでしょうか。

最後に自由記述の形で「あなたにとって日本とは」【問11】との質問をしたところ、最も多かったのが「母国」「祖国」「故郷」といった日本に対する愛情を表現する回答でした（全回答数403名中147名）。また「誇りを感じる」「文化的に優れた国」「政治経済的に恵まれた国」などの自国への積極的評価（162名）を加えると4分の3（309名）以上の学生が、日本を肯定的に見ていました。

一方、「あまり誇れない国、いくつもの問題を抱えた国」「政府が信頼できない国」などの否定的評価は94人でした。

この結果からも読み取れるように、本学学生の多くは、おおむね日本人であることを肯定的に自覚しつつ、日本の現状を冷静に見つめ、日本国民として、自国の将来についてきちんとと考えていることが分かりました。少なくとも本学学生は、社会に対して無関心ではなく、日本の将来への希望も決して失っていません。

私たちはこういう希望を持っている学生に対して、どのような展望を提示できるのだろうかと自問しています。

今回のアンケートでは、繰り返し日本に足りないものとして「リーダーシップ」「目的意識」「行動力」などの回答が寄せられていましたが、この日本に足りないものこそ、次代を切り拓く私たちが身につけなければならない重要な資質であると確信しています。

2. 提言：次代を担う主体性を獲得するためには

私たちが取り戻すべきものとは？

畠山ゼミナールでは、今年度春学期（2010年4月～7月）、山本七平著『日本人とは何か。』をテキストに、日本の文化や歴史について考察を重ねてきました。

山本氏の実証的考察は、私たちに日本文化の本質を見直すきっかけを与えるものでした。「かな文字」の発明が特權階級による「文字の独占＝思想の独占」を許さず上下の身分を越えた民族的統一をもたらしたこと。民主主義の原則である「多数決」方式が日本では古くから行われていたこと。支配者への対抗勢力が起請文を交わして「一味同心」となって「一揆」を形成するという一種の契約社会が普及したこと。その結果、平等社会が形成され独裁者が生まれなかつたこと、等々の指摘に、私たちの日本観は大きく変わりました。

自分の考えを自分の言葉と自分の文字で、何の束縛もなく自由自在に記しうること、それが広く庶民にまで普及して識字率を高めたこと、また和歌・俳句を生み出して日本的な感性を育んだこと、この重要性はいくら強調しても強調し足りないが、後述するよう問題はそれだけではない。簡単にいえば「かな」がなければ日本は無く、そうすれば日本文化は当時の超先進大国中国の、漢字文化の中に包摶され埋没してしまったかも知れないということである。

山本七平『日本人とは何か。』（祥伝社）より

中でも、辺境の最も後進の国だった古代の日本がやがて一気に発展へと走りだした背景に、国民が身分の上下を越えて一体となって生み出した独自の「文化の型」があると気付いたことは重要でした。それによって、日本は一般的の庶民にいたるあらゆる身分の人々が国づくりに深く関わってきた国家であると私たちは確信でき、日本という国をつくり上げていこうとする古来の日本人が持っていた力強さを実感できました。

それとともに私たちは、今日の日本人が社会を批判するばかりで、国の一員として国をつくり上げていこうという気持ちや姿勢を持たず、自分たちが日本という国をつくっている当事者であるという自覚を喪失しているのではないかという印象を強く受けました。

批判だけではなんの変革にも繋がりません。自ら何ができるのかを考え、それを実行してこそ変革は実現できるのではないかでしょうか。

現代の日本人は、古来の日本人が持っていた変革の精神をすっかり忘れているように見えます。しかし、日本の歴史には、間違いなく、上流階級から庶民に至るまであらゆる身分の人々が、自ら主体者として、ともに日本の行く末を担おうとした精神の伝統があります。

私たちは、日本人の伝統として息づく変革の精神を、現代の日本人に取り戻したいと考え

ます。外からの借り物ではなく、日本人自らの内發的な力を信じたいのです。多くの伝統が受け継がれてきたように、このような国をつくり上げていこうとする精神も受け継がれていくべきだと考えるのです。

私たちは、日本人が建国以来受け継いできた、こうした意識や伝統を基盤に、現代日本が持つ様々な潜在力を発揮することを「日本力」と定義し、その力を現代の日本人一人ひとりの心の中に取り戻すことを提言します。

先人達が築き上げた伝統基盤を常に回帰すべき原点として、この日本力を確固たるものにしたいと念願し、刻々と変化していく世界情勢の中、今こそ日本人本来がもっている変革力を取り戻さなければならないと強く決意する次第です。

日本力

日本の伝統に息づく変革の精神とはいかなるものなのでしょうか。坂本多加雄氏は、『求められる国家』と題する著書の中で、「国家としての理想を考えるにあたっては、‘らしさ’の追求が必要である。この‘らしさ’とはさまざまなアイデンティティーが複合したところに総和として存在する。個々が自分らしさを追求することから始めれば、その総和として日本の行くべき道が見つかるはずである。」と述べています。

坂本氏の著書にヒントを得た私たちは、「らしさ」を追求していけば日本の真髄がみえてくるのではないか、「日本人らしさ」が日本力につながるのではないかと考えました。ここでいう‘らしさ’とは個人一人ひとりの個性を越える模範としての「型」です。一人ひとりが追及した「日本人らしさ」を総和したものが日本の性質となり、それが日本力になると考えたのです。

では、「日本人らしさ」とはどのようなものが考えられるでしょうか。

まず一つ目に、日本人は何よりも調和を大切にします。そこには自他一体の観念が息づいています。日本人は、全体のことを考え、自己犠牲を厭わない姿勢を美德と感じ、そうした行為に敬意を払います。自己が他者に生かされていることを実感し、それを「恩」に感じ、己の事だけを考えるのではなく他者の事にも心を碎きます。言わば、日本人は己を捨て他者に尽くすことを喜びに感じる感性を持っており、自己と他者を一体化させ、他者の事を自分自身のことのように考える心の性質をもった民族です。調和を大切にする日本人の精神は、こうした日本文化に根付いたものだと言えます。

人のために役立つ事をしたい、という気持ちはもともと日本人の伝統文化にあります。…実は国際協力は日本の伝統文化に根ざしたものだと思っています。

緒方貞子・国際協力機構(JICA)理事長の発言

登呂遺跡を発掘された樋口清之博士は、登呂遺跡に日本の文化の原点があると次のようにいわれる。

「…結局、水田と言うものは、急に一人が思い付いて鍬や鋤一本でできるものではなく、大勢の共同労働と、その共通技術と、統一組織の中ではじめて成功するもので、日本が早く水稻栽培の文化で国家成立に成功したのは、これが出来得たためだと強調したいのである。そのために社会的に共同体を維持できる組織とその組織を機能させる指導力が生育していて、共通目的で共同労働が営まれなければならないわけである。」と。

いわば共同体を形成して生きる以外に、生きる方法がない。

山本七平『日本人とは何か。』(祥伝社)より

二つ目に、日本人は何事に対しても心を砕き物事を徹底的に追求しようとします。何事においても真剣に考え、誠心誠意、物事に臨もうとし、万物から多くの事を学び考え、自分たちの能力に還元しようとする傾向があります。

日本人は決して「ものまねの天才」というわけではありません。「まねる」にも、そこに辿り着くまでの能力が必要です。自前の能力を持っていたからこそ欧米の技術も吸収できたのです。常に学び吸収していく姿勢が今日の日本の経済発展にも繋がってきたのではないかでしょうか。先人たちは、技術だけでなく、能力を吸収していく姿勢をも築き上げてくれたのではないかと思います。

調和を大切にしていくこと・心を砕き物事を徹底的に追求していく姿勢、これらが「日本人らしさ」の精神です。この‘らしさ’こそ、先人たちが持ち続けた様々な日本人の精神の総和であり、それらを私たちは「日本力」だと考えます。

日本はもちろん工場生産方式の導入と、新しい西欧の技術の習得も怠らなかった。文久二年幕府暦局御用時計師大野規周はオランダに留学し、時計だけでなく航海用クロノメーターと測量機械の製造技術を五年間学んで慶応三年に帰国した。彼は和時計の日本技師長ともいべき位置にいた人であったから、必要なことを実際に能率的に吸収して来た。明治維新後、彼は大阪造幣局技師として精密機械産業の発展に努力するとともに、大阪に時計製作所を設立し、多くの技術者を養成した。もちろんこのような努力をしたのは彼だけではない。ここで蓄積された伝統的技術と導入された技術と生産方式が統合して、日本の精密工場の基礎ができ、やがてそれが世界を制覇するのである。…(中略)…彼らは欧米の多くの機械の図を見たとき、すぐにその構造を理解し、同時に同じものを自前の技術で造る能力を持っていたのである。

山本七平『日本人とは何か。』(祥伝社)より

展望：自らに日本力を取り戻す

上記に述べた「日本力」を取り戻すには、私たち一人ひとりに何が必要なのでしょうか？私たちの考察は、自らの心構えに及びました。そして、①《当事者意識》、②《目的意識、自己への確信》という指針を見出しました。

① 《当事者意識》

現代の日本人は、「国」というものを強く意識しなくてもよい環境に恵まれてきたといえます。それは確かに幸いなことではありました。しかし反面で、現代の日本人には「国」と自己の結びつき、すなわち「国家意識」が薄弱で、国民としての当事者意識が欠落しているように見えます。そして、このことが、昨今の無責任な政治批判や、若者のすべての物事に対して見られる意欲の減退につながっている一因ではないかと考えます。

しかしながら、「日本という国がなければ今の恵まれた生活はありえない」ことは事実であり、「個人は国によって守られている」ということを私たちは決して見失ってはならないと思います。言い換えると、「国があるから個人は存在できる」ということです。私たちは果たしてこれらのこととどれほど自覚しているでしょうか。

私たちが実感しなければならないことは、現代の日本人が極めて恵まれた社会（国）の中で生活しているということです。不景気とはいえ日本国民の生活は世界の中で高水準を保っています。また、日本の高い技術力は世界トップレベルです。さらに日本には他国とは比べ物にならなくくらいの豊かな自然があり、その恩恵を預かってきた日本人の自然観は非常に豊かなものです。これらなくして、私たちの今日の生活は成り立ちません。

もし、このような「国あっての個人」ということを実感できれば、私たちの国に対する評価は変わってくるに違いありません。

さらに私たちが思いを馳せるべきは、この恵まれた社会が私たちの先人の努力の賜物であり、これを守り伝えることができるのもまた、日本国民以外の何者でもないという事実です。すなわち「国を支えているのはその国民である」ということです。

こうした、「国あっての個人」「国民が支える国」という、自己と国家との結びつきを実感できるならば、この日本を担っているものが他ならぬ日本国民である私たち一人ひとりであり、自らの行動が日本の行く末に直結していることを痛感できるようになり、国の現状を我が事として、また、自らが国を動かす当事者であるということを、真摯に受け止められると思います。

会社でも、破産すれば最も被害をこうむるのは、外資でもどこでも行き先に不足しない人ではなく、会社がつぶれようものなら行き場のない人々であろう。ならば、会社の経営状態に誰よりも関心を持ち、その向上を誰よりも願うのは、幹部社員ではなくて一般社員であるはずだ。国家も、それと同じなのである。

塩野七生『日本人へ リーダー一篇』（文藝春秋）より

そして私たちの世代は、まさにこれから日本をつくっていく次代の「当事者」なのです。私たちは“日本を動かす自分”という自覚を抱くべきではないでしょうか。

② 《目的意識、自己への確信》

アンケートの結果にもあるように「目的意識」が必要だと感じている学生は少なくありません。では本当に私たちは「目的」を持って生きているのでしょうか。

大学生の中には、“とりあえず”“周囲がそうだから”という理由で大学進学を考えていた人も少なくありません。自ら決断したことに自信が持てず周囲の人々に流されたり、自分の「目的」がわからなくなってしまったり、さらに、それについて考えることからさえ逃げている人もいるに違いありません。

しかし、私たちが「目的」を持って生きるためには、結局は、一人ひとりが自らの行動に何らかの意義を感じることが不可欠です。言い換えれば、周りに流されることなく、自分自身で決断し、その行動理由を考え、その決断に意義や確信もつという、実に孤独な作業を行うことが必要となります。

ところで、これらの《目的意識、自己への確信》は一体どこから生まれるのでしょうか。結論から言えば、それは他者との関係の中にこそ見出せるものです。当事者意識とは、ある対象を自らの問題ととらえる意識ですが、社会という共同体にあっては社会の一員としての自己、すなわち、自分ひとりだけではない、他者があつて自分があり、他者と自分とは一体であるとの実感によって生まれるものです。そこから「私がやらなくてはならない」という使命感や、自身の役割に対する自覚が発生します。他者との関係性の中での自身の役割の自覚が《確信=使命感》となり、役割を達成するという《目的》に対する意義を実感できるのです。

また、先人たちに思いを馳せると、私たちは先人たちの歴史の積み重ねにより生かされていることを実感できるでしょうし、そこからそうした歴史の継承者としての自己に対する確信を見出し、自己のアイデンティティー、自らの存在意義や人生の目的や役割、ひいては命の本質がはっきりと確信できるようになっていくと思います。

つまり私たちが「目的」を持つための第一歩として、あらゆる他者に生かされている自分を実感すること、自らも必要とされている存在であると実感することが必要ではないかと強く感じるのでした。

「**だけども、僕はやる。この世の中に誰かがやらなければならないことがある時、僕は、その誰かになりたい。**

—国連ボランティアとしてカンボジアで殉職した中田厚仁氏(享年25歳)の言葉

中田武仁『息子への手紙』(朝日新聞出版社)より

結論に代えて

自己を確立することによって、先人たちの築き上げてきた日本の潜在力をどう生かすか。日本人として、すなわち日本の将来を担う唯一の当事者であることを自覚して、今後、どのように社会に貢献していくか、さらに国際社会に対してどのような使命を果たして行くのか、を探求していくことが課題であると思います。

そして、そうした生き方に確信を与える裏付けとなるのは、私たちの先人が築き上げてきた歴史と伝統です。

世界の中の日本の使命は決して小さいものではありません。それゆえに、次代を切り拓く私たち日本人一人ひとりの使命感の発露は重要です。

こうした歴史と伝統に基づく使命感に裏付けられた、私たちの日々の研鑽の積み重ねが、一つの大きな力となって**日本力**が生まれるのだと確信しています。

21世紀においては、世界各国の関係が緊密化するなかで「国家」の役割を改めてどのように構想し、「国民」の概念をどのように築き上げるかが問題になる。積み重ねられてきた歴史や文化を、伝統を再構築し、いかに「国家観」を作りあげるかが重要である。

坂本多加雄『求められる国家』(小学館)より

編集・企画：平成22年度学習院女子大学畠山ゼミナール(国際政治研究室)

【10期生】赤羽夏江、池田早希、石井夏希、植村奈央、遠藤幸恵、遠藤百世、大網真依、大澤有佳、佐藤未衣、瀧谷涼子、高野優、辰野沙織、藤井美奈子、村山かおり、山下彩奈、米田希美

【11期生】飯島瑛美、石井友梨、石川とも、岡戸まどか、小林あすか、作田なつき、須藤実香、徳屋郁子、富田奈々、中山亜美、野口明日香、原田美裕、林玉青、水沼里美、安田智子、山本千愛、山本真由

学習院女子大学
第10・11期 畠山ゼミナール